

ゴドーを待ちながら



前 経団連企業行動・SDGs 委員長
第一三共元会長

なかやま じょうじ
中山 譲治

私は45歳の時の人事異動で、初めて医薬品（新薬）事業の仕事に関わった。あまりにも専門性が高く難解な事業なので、長く事業に携わってきた社員たちに「これって、簡単に言えばどんな事業なの」と聞いてみた。その時の開発部の若い課長の言葉が忘れられない。

「中山さん、『ゴドーを待ちながら』という演劇作品を知っていますか。皆はゴドーがやって来ると言って待っているけれど、ゴドーは最後までやって来ない。あれですよ、あれ。皆は『期待の新薬がやって来る、やって来る』と言っているけれど、期待の新薬はやって来ない。私なんか、定年までにそんな新薬の開発のほんの一部にでも関われたら、ものすごくラッキーだと思っているんですよ。」

私はそれを聞いて、「いくらなんでも、そこまでひどくはないだろう。そんな状態なら事業が成り立つはずがない。きつと、突然転動してきた部長が事業を甘く見ないように、脅すつもりで言っているのではないか」とその時はそう思った。

それから25年ほど新薬事業に関わったが、多くの失敗を経験し、彼の言ったことが脅しではなかったことが骨身に染みてわかった。

人間の生命メカニズムは複雑で、広大な未知の領域が残っている。そのため新薬開発は失敗がほとんどで、候補化合物が新薬になる確率は3万分の1と言われている。強い意志がなければ、開発を続けられない。その意志を支えるのは、「病に苦しむ患者さんを救いたい」という強い想いだと思っている。家族が病に苦しんだこと、それが製薬会社に入った動機だと話す社員も多い。

第一三共の社長になった頃、患者さんのことを知るために有志で活動をしている研究者たちと知り合った。そして、その活動は成長し、現在は自主的なサイトが立ち上がり、社員の闘病経験や患者さんからの投稿などが共有され、製薬他社の社員との協働活動も進められている。これが新薬開発に挑み続ける社員の力の源であり、ゴドーならぬGODを待ち続けている者の祈りだと考えている。